

II-6 死後房水糖値の測定意義（第2報：房水中Cペプチドとインスリン濃度について）

○町田光司^{1, 3, 4} 町田祐子¹ 長谷川範幸^{2, 3, 4} 中村光男⁵
高橋識志⁶

（社団医療法人白鷗会 まちだ内科・眼科クリニック¹ 国民健康保険板柳中央病院² 青森県警察医会³ 青森県死後画像研究会⁴ 弘前市医師会健診センター⁵ 弘前大学医学研究科法医学講座⁶）

死後経過に伴って赤血球の解糖系により血糖値は下がり続けるが、血球の無い房水の糖濃度は比較的緩徐に低下し、比較的安定である。

死後房水糖値（PMAG：Post Mortem Aqueous humor Glucose）を検討する事により、死亡前の血糖値の推定が可能である事を昨年の本学会で発表した。

PMAGが死後1～2日の短時間で20mg/dl未満の低値の場合には低栄養や低血糖が疑われるが、今回は特に低血糖の診断について房水中のインスリン（IRI）やCペプチド（CPR）を測定して比較検討した。

低血糖を疑われた検死5例について死後房水中のインスリン（IRI）を検討したところ、インスリン治療中の3例にIRIが認められ、房水内に外因性インスリンが移行したものと考えられ、更にPMAGの低い2例では低血糖と考えられた。

次にインスリンについて検死7例の房水中のCペプチド（CPR）を検討したところ、CPRは全例に認められたため、内因性のインスリンも房水に移行しているものと考えられた。

更に、低血糖3例の臨床例と、房水中IRIとCPRを測定し得た検死9例においてIRI/CPRを検討したところ、外因性インスリンによる低血糖疑いの検死例ではCPRが測定感度以下に抑制され、この比が少なくとも1.0以上と高値であり、低血糖の鑑別診断に有用と考えられた。